OUR NEWS

OKUDA URBAN RENOVATION 2023.1 NO.1

生活・文化拠点再整備事業

発行・編集：藤沢市企画政策部企画政策課

OUR NEWS では、市民会館や南市民図書館などの公共施設を複合化して再整備する「生活・文化拠点再整備事業」の進捗状況をお知らせします。創刊号では、2022 年 12 月 17 日に開催したシンポジウムの内容をお届けします。

本市が進める市民会館を含む生活・文化拠点の再整備について、これまでの取組を報告するとともに、公民連携によるまちづくりの視点から、生活・文化拠点の未来像について市民とともに考えることを目的に開催しました。

【プログラム】

01 生活・文化拠点 (市民会館等) 再整備の取組について

02 基調講演「公民連携による新しい公共空間のつくりかた」

講師：株式会社オープン・エー｜Open A　代表取締役　馬場 正尊 氏

03 トークセッション「エリアの価値を高めるために」

株式会社 オープン・エー｜Open A 代表取締役 馬場 正尊 氏　×　有限会社 BACH(バッハ) 代表 幅 允孝 氏　×　藤沢市 副市長 和田 章義

生活・文化拠点再整備事業シンポジウム

01

「生活・文化拠点（市民会館等）再整備の取組について」

藤沢市企画政策部長

基本構想策定からの取組

ー藤沢市民会館等再整備基本構想（以下、「基本構想」）では、今後の事業推進および事業手法の考え方として、基本理念を核とした事業の目指す「未来」を実現するために、最も適した運営手法を追求し、民間事業者に積極的にアプローチしていくこと、としています。基本構想の策定以後、基本構想に掲げる基本理念に基づき、実現したい未来像を描きながら、「市として何がしたいか」を明確に整理した上で、事業の可能性を最大限引き出すことに主眼を置いて検討を進めてきました。本事業が、単に合築した「ハコモノ」の更新ではなく、エリアの価値の向上に資するものとなるように、この事業でどのような未来を実現したいのか＝「ビジョン」を定め、その実現のために、「どのような施設にするか」、「どのような運営を行うか」について、民間事業者からのノウハウやアイデアを最大限求め、事業を進めていきたいと考えています。

本事業のビジョン

ー本ビジョンは、藤沢市民会館等再整備基本構想策定検討委員会からの提言と、市民からのご意見等を踏まえ策定した基本理念から導き出したものです。（図 1：ビジョン）

未来への投資

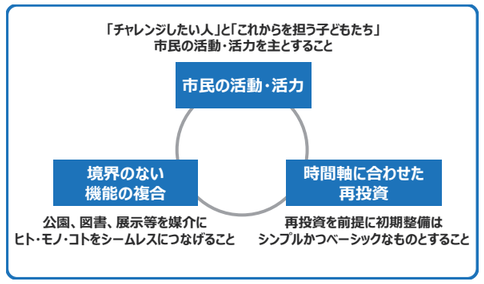
ービジョンの実現に向けては、「未来への投資」を基本的な考え方として、本事業が目指す 3 つのポイントを掲げています。（図 2：3 つのポイント）

ふじさわMIRAIファーム
～ここからはじまる未来への種まき～

なにかにチャレンジしたい人、これからを担う子どもたち、
「まだ知らない新しい可能性」との出会いをみんなで応援します。

このプロジェクトでは、なにかにチャレンジしたい人とこれからを担う子どもたちの「体験」「実践」「挑戦」をとおした育ちや活躍を支援します。
また、その中心となる人や活動、この場に集う人々をシームレスにつなげることで、多彩な活動を生み出すきっかけを作り、成長と共創が持続する未来を実現します。

▲図 1：ビジョン



▲図 2：3 つのポイント

1、市民の活動・活力

ー「メインターゲット」として、市が集中して投資することを具体化した点は、基本構想で示す「新たな活動を創造・支え・育てる」、「藤沢らしさ」、「魅力と活気にあふれた」といった部分をあいまいなままとせず、「体験」、「実践」、「挑戦」といった活動とその活力を中心に投資すること意味します。「メインターゲット」を定めたことで、それ以外の市民や利用者が除外される考えではなく、公共空間であることから、「誰でも立ち寄れる」「サードプレイス」「憩いの場」となることは大前提であると考えています。

2、境界のない機能の複合

ー単に機能や空間を共用するだけの機能集約・複合化ではなく、公園、図書、展示などを媒介としながら、境界のない機能の複合として、ヒト・モノ・コトをシームレスにつなげます。基本構想で示す「奏で響きあう」、「共創」、「交流をはぐくむ」について、媒介と捉えるものを具体的にして、ヒトは「この場に集う人々」、モノは「空間や場」、コトは、「ここでの活動とその活力」をシームレスにつなげることを明確にしています。

3、時間軸に合わせた再投資

ー時代の変化やニーズに合わせて、「ここでやること」に変化を与える再投資を主として、設備等のハード整備を要する場合にも対応できるように考えています。従来的なイニシャルへの投資で終わっていた事業では、「ここでやること」の変化に伴う財源的な余力を無くし、方向転換、軌道修正をしながら新陳代謝を図ることの妨げになると考えています。ビジョンの実現に向けては、今後、地域に根ざした生活・文化への貢献に対して意欲を持った民間事業者と協働していくとともに、市民の皆様にも、本ビジョンに共感をいただきたいと考えています。

今後について

ー令和 5 年度の OUR Project※マスタープランの策定に向け、公民連携による効果を最大限発揮するために必要な事項や事業手法についてまとめる「公民連携モデルプラン」の検討、都市拠点やエリア整備における公共空間のハード整備で、留意すべき基本的な事項等についてまとめる「アーバンデザインガイドライン」の検討を引き続き進めていきます。シンポジウムで公表した本事業におけるビジョンをより一層、市民の皆様と共有を図ってくため、今年度中に対話集会の開催を予定しています。また、ビジョンの実現に向けて、民間事業者との意見交換および対話により、本事業の実現可能性や市場性の有無、担い手となる事業者の発掘やアイデア、事業者公募に向けた条件等について調査するため、サウンディング型市場調査を実施します。来年度以降は、関係団体等からも幅広く意見を聴取する機会を設けることを予定しており、市民の皆様や利用される関係団体の方々などに対して、事業への理解を深めていただき、より身近な「場」となるよう努めていきたいと考えています。

※「OUR Project」：「Okuda Urban Renovation Project」略称

生活・文化拠点再整備事業シンポジウム

02 基調講演

「公民連携による新しい公共空間のつくり方」

馬場 正尊／ Masataka Baba

株式会社オープン・エー｜Open A

ー今日のシンポジウムは藤沢市にとって、ものすごく重要なプロジェクトが始まる、キックオフのイベント。複雑なプロジェクトの全てについて色々語ることはできないが、日本中で、小さな街で、それから大きな街で、色んな公共空間の再生の仕事に関わりながら、試行錯誤を続けており、これから藤沢市で始まるプロジェクトのヒントを提供したい。自分自身が当事者としてどうこのプロジェクトや変化に関わることが出来るかが重要で、そのあたりを想像しながら聴いてもらえるとありがたい。

公民連携とは

ー公民連携とは何か。今までの公共施設は、行政が作って、行政が運営してきた。そのことによって、安定していたが、自由度はなかった。今の行政は、お金と人材をあらゆる分野に持っていかれて、文化・芸術にそそぐ余裕はない。そこで編み出されたのが公民連携である。

公園 ×〇〇

ーあえて公園という観点からお話ししていきたい。公園は図書館や市民ホール、周りの街などをつなぐ空間である。公園に人が集まるとそれらの施設にも人が集まるようになる。公園と何かを掛け合わせることによって、その場所の価値が画期的に上がっていくということについて、事例を交えて紹介したい。従来の公園はデザインとマネジメントをバラバラに進めていたが、今後の時代はセットとなって進めていくことが求められる。

衝撃を受けた公園

ーブライアントパークというニューヨークの公園は街の中心にあり、公園と図書館が隣接している。日本と異なり、市民が思い思いの時間を過ごしている。図書館がはみ出しているかのように本を読んでいる人もいれば、卓球台で見知らぬ人同士で遊んだり、チェスをしている人もいる。カフェがあり、夜には映画祭が開かれることもある。無線 LAN 等の整備では ZARA が協賛している。驚くべきことは、公園の運営会社の売上が 15 億円もあること。もはや公園がコストではないと認識できる。運営企業には、営業、マネジメント、デザイン部門がある。ミッションは文化的な活動の拠点であり、NY の新しい目的地をつくることとしている。その結果として、周囲の土地の値段が上昇している。デザインとマネジメントが一体となることで、公共性を保ちつつ、土地の魅力を向上させ、経済性も両立している。この事例を見て、自分も関わりたいと思うようになった。そこで私が nest という組織の一員としてマネジメントに関わった南池袋公園。公園の中にカフェを作り、公園とカフェをつなげるようなデザインになっている。公民連携でパークマネジメントの企業 nest を形成し、公園を盛り上げるイベントやマルシェを行い、そのうえでメディアを作り、SNS で拡散するなどした。豊島区は 23 区唯一の消滅可能性都市であったが、この公園整備の効果によって、住みたいまちランキングに入るようになった。それに伴い、土地の値段、賃貸の値段が上がった。公園近くにあるグリーン大通りに、公園の盛り上がりを引き込み、ストリートを盛り上げるプロジェクトが進んでいる。椅子や敷物、カフェを設置することで、人の動きが徐々に変わっていくという実験結果を得た。こうしたソフト実験結果をハードにも生かす取り組みが行われ、サンシャイン、無印良品、東急ハンズといった地元に縁のある企業を巻き込み、今では運営にもコミットしてもらっている。

小さな街での取り組み

ー先ほどの例は東京だが、地方にも盛り上がった例がある。佐賀県の江北町という人口 9000 人のほど小さな町の事例を紹介する。ここではプロセスを工夫し、公園の整備に係るワークショップを行い、公園に「何が欲しいか」ではなく、公園で「何ができますか」、「何をしてくれますか」と、受動的な町民ではなく、能動的な町民に対して主体的なアイデアを募った。その結果を反映し、町民のアイデアを実現できる場所にしたところ、英会話教室や保育園の子どもを集めて遊んだり、マルシェが実現したりと、提案した人たちがコミットしてくれた。ハードの整備は業者が担うが、運営は地域おこし協力隊の隊員に委ね、地域の声を聴きながらプロジェクトを進めた。この公園の盛り上がりで人口減少に歯止めがかかり、周囲の土地の値段も上がった。ハードとソフトの組み合わせが成功のカギであることは、この例からも言える。

次に佐賀県のある公園で、図書館とつながった公園の例を紹介する。ここでは県知事に直接プレゼンする「勝手にプレゼン Fes」というイベントが開催されており、自分もプレゼンし、採択された。図書館と公園をつなぐようにすることで、子どもたちが遊ぶようになり、様相が変わった。隣接している市村記念体育館は著名な建築家である坂倉準三によって建てられたが、そのまま利用することは難しかったため、クリエイティブ・センターとして再興することとした。建物単体でなく、面で展開していくまちづくりをイメージさせる施設となっている。

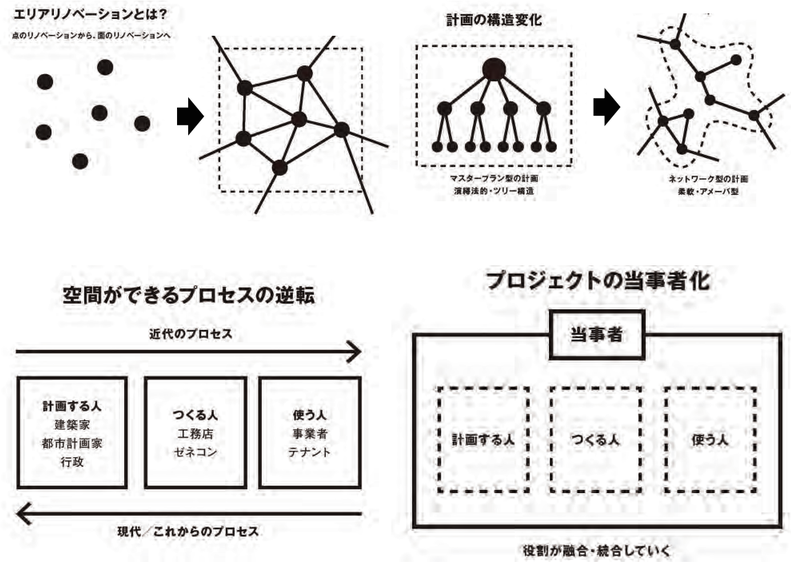
エリアイノベーション

ー従来は行政の計画を市民に落とし込んでいたが、今後の都市計画は、部分ごとに計画ができ、それがネットワーク型につながり、政策形成がなされることで、皆さん一人一人が組み込まれていく。これをエリアイベーションと呼んでいる。

次に仙台の事例を紹介する。社会実験によって、場所のポテンシャルを認識するという取組みを行っている。場所がどんなポテンシャルを持ち、市民への開放が可能かという点について、仮設店舗のカフェと本屋を設置したり、家具や植物などの設備を置いて検証した。その結果、人がたくさん訪れることが分かり、ポテンシャルが顕在化した。次に市役所の建替え事業が計画され、そのイベントで市役所と公園をつなげて人の流れを作り、市役所と公園を面白くすること、公園管理と合わせて民間に任せることはできないか投げかけを行い、現在計画が進んでいる。

公民連携協定によるパークマネジメント

ー最後に公民連携協定によるパークマネジメントの事例を紹介する。静岡県沼津市にある「泊まれる公園 inn the Park」という施設で、運営を手掛けている。赤字続きの少年自然の家を民間が出資することで、再生し、公園全体を盛り上げるという狙いがあった。公民連携協定により、民間企業が主体となって、森の中に泊まれる施設を設置した。屋外の映画祭のイベントやフェスを民間が主体となって開催するなど、沼津市の誇りとなるような公園となった。成功のカギは、部署横断の公民連携室が市役所内にできたことにある。公民連携の窓口が、縦割りにせずに取り組んでくれた。さらに主体的な役割を担った市職員は、当事者意識を持っていた。行政側の意識も重要なポイントなってくる。空間ができるプロセスとして、これまでは、「計画する人、つくる人、使う人」の流れであったが、これからの時代は逆転して、「使う人、つくる人、計画する人」の流れで考えられるべきである。また、それぞれが当事者になり、行政、企業、市民がどのようにかかわっていくかが重要となる。この拠点が、藤沢市の文化・芸術、そして経済の中心になっていってほしいと願っている。



（※馬場氏説明スライド図から引用）

質疑応答

質問者①　ーオランダやイギリスのコッツウォルズなど、親水空間をうまく使った例などもある。日本でもそのような事例はあるか。

馬場氏　ー図書館と公園を繋げた佐賀のこころざしの森では、噴水を壊して、子どもに人気の水遊びの場所とした。その土地、その場所の文脈に合わせた計画を立てていくことが大切である。藤沢のこの場所らしさは何かということから考えていかなければならない。

質問者②　ー新しい事例や流れを聞いて、なるほどと思うことが多かった。しかし、現実として、藤沢の規模ともなると、作ったときの理念が事業の進むうちに変わってしまい、思い通りにいかないことが多々ある。どのようなポイントを押さえて進めていけばよいと考えられるか。

馬場氏　ー計画が計画通りにならないことは頻繁にある。市は今後、マスタープランを作っていくと思うが、空間も運営もオープンエンドなものにしたほうがよい。変更したり、工夫したりしながら、バージョンアップすることが前提な計画にしておくことが重要と考えている。例えば客層が想定と違う場合に手を打てるように、行政と民間が一緒に考えながら、変更可能性がある余地を残しておくことが大切である。空間のハードの設計も運営の設計も、自由度を求めることが重要となる。

質問者③　ー現実に行政というのは堅い。一度決めたことを守る傾向にあると思うが、突破するカギはどこにあるか。

馬場氏　ー佐賀県では、「さがデザイン」という部署をつくり、行政と民間を調整し、うまくいっている。個別解ではあるが、日本の自治体において硬直化を逃れるためには、変更や変化に対応する組織作りが重要となり、そのことによってアウトプット、地域の魅力、経済性などが大きく変わっていく。大きな都市である藤沢市でそれを行うのは大変だと思うが、試金石となる。ぜひ、柔軟なプログラムの構築をハード・ソフトともに行ってほしいという意味でエールを送りたい。

質問者④　ー歴史的に市民が求めた表現活動の拠点として、市民会館の存在は大きい。親としては、子どもに芸術活動を見せていきたいという思いが強い。市民が主体となって、表現やアート活動をサポートしていく施設等の事例があれば、ご紹介いただきたい。

馬場氏　ー市民ホール自体は、運営や経営が大変だという認識。考え方次第ではあるが、収益を生み出す事業と、必ずしも収益を生み出さないが残したい事業を、上手にハイブリッドに存在させたほうがよい。市民ホールを運営する事業者とその方針が重要となってくる。従来は、行政直営か指定管理であったが、公園と市民ホールが一体化すれば、複雑化した組織がつくれる。お手本となる事例は必ずしもあるとは言えないが、市民が培ってきたカルチャーの継承の仕方のデザインを計画段階から行っていくことが大切であると考える。

生活・文化拠点再整備事業シンポジウム

03 トークセッション

「エリアの価値を高めるために」

馬場 正尊／ Masataka Baba

株式会社オープン・エー｜Open A

幅 允孝／ Yoshitaka Haba

有限会社 BACH（バッハ）

和田 章義／ Akiyoshi Wada

藤沢市 副市長

幅氏　ー私は様々な場所に書店や図書館を作る仕事をしている。検索型の世の中で、知らない本に偶然出くわす機会を作ることや、他者の時間を奪うことによって富が発生する世の中において、本という没入に時を要するものをどのように届けるかということを考えながら活動している。

図書館の役割とは

ー公共図書館のイメージとして、無料で本が借りられる場所ということが挙げられるが、現在の潮流として、教育とコミュニティの場所として生まれ変わるという点が挙げられる。もう 1 つの変化としては、図書館の蔵書数で優劣を測らなくなっていること Google が書籍をデジタル化するにつれ、冊数ではクラウド上の電子書籍に勝てなくなってきた。リアルの図書館の蔵書は、選択の結果となっている。図書館の使命は先人たちの知恵をアーカイブすることにある。NDC と呼ばれる本の分類方法は、1 冊ごとに番地を付与することによって、いつの時代の本でも取り出すことを可能にするという重要な役割を果たしている。一方で、そうした役割は尊重しつつも、目の前を通り過ぎる人がいるのも事実で、そうした人には投げかけをしていかなければならない。

なぜこの時代に本なのか

ー国際情勢を知りたければ YouTube でも十分に理解できるではないかと思われる若い方もいるかもしれないが、コロナ禍で感じたこととして、紙の本には著者名、引用元などがあり、責任の所在が明確となっていることがある。個々の情報に対して、一つの情報からだけでなく、多角的な検討を行ったうえで、自分の頭で考えて、自分で判断することが求められている時代にある。

コロナ禍を経て

ーコロナ禍での変化として、本を読み出したという人が増えた一方、映像のサブスクリプションサービスに登録した人が増えた。それぞれのメディアには特性がある。映像メディアは、自分で選択しているように見えて、実はアルゴリズムのレコメンドによって選ばされている側面があり、終わることができず、延々と見てしまうという特性がある。コンテンツが注入され続けてしまう。一方で、本は立ち止まって見るなど、コンテンツに接している時間を自分で選択できる点に特徴がある。システムの下に人間が紐づく時代になりつつある中、時間に対する自発性が働くことが、本、特に紙の本のよいところだと思う。

図書館づくりのポイント

ー図書の場所をつくるときに考えることは、普段よりも遅い時間をつくること。LINE の返信が素早く求められたり、即時性が求められる世の中において、自分が何かに集中することが難しくなっている。テキストや著者、自分と向き合うのがとても大事であると考えており、図書館施設を作るうえで、意識している。複合化という点では、図書館は主役ではなく、後ろから支える存在である点が重要となる。本の強みは何とでも関係性を持つことが出来ることにある。本が好きな人が居心地よく時を過ごすのももちろんよいが、本に興味のない人でも、木やダンスなどトピックを通じて、接着剤となる役割を果たせる。複合施設となったときに、図書を押し出すのではなく、好奇心などを通じて人々を結びつけるという役割を前面に出すとよいのではないかと個人的には思う。

図書館事例を踏まえて

ー神奈川県立図書館の新しい本館を教育委員会の顧問としてお手伝いし、ここでは新しい本を入れられなかったため、空間を整えること、居心地を整える、読書行為の集中を促すといった、本と人をどうしたら結び付けられるかという点に力を注いだ。

次に大阪の中之島にある図書館は、安藤忠雄氏の意図としては、本に囲まれている空間をつくりたいという思いがあり、ディスカッションを行った。結果として、高いところの本は副本で、上と下に 2 冊置くようにした。建築や空間の力が強いのが現状で、人の動きはあるが、果たすべき機能とのバランスが重要となる。選書では、子どもを子ども扱いしないことを裏テーマに意識した。本は 2 度と同じように読めない。自分の状態で受け取り方が変わるということを、大人たちの真剣な読書の姿を通して子どもたちに見せる場所としても面白い。図書と触れる場所をつくるということは、今までのアーカイブと新しい読者、未来の子どもたち、興味を持ってくれる人たち、新しい挑戦をしたい人たちの役に立つ場所になると思うので、ぜひよい場所にしてほしい。

馬場氏　ー使う言葉がきれいで、それを追っていくだけでもとても楽しかった。特に響いたのは、時間という言葉。本は、時間をコントロールする、時間の自発性を復活させるなど、時間に対する感受性を鋭くさせるという点が面白かった。もう一つは、本という名詞に対して、動詞を使って語っていたのが印象的だった。本が訴えかける、本を場所にしみこませるといった表現は、とても共感できた。本は静的なものだが、動詞で語るというのが印象的であった。

幅氏　ー本は人だと思っている。必死で誰かが絞り出した言霊が定着しているものなので、人に近い。デジタルは書き直せるが、紙は書き直せず、よく推敲するので、何かが宿るのではないかと思う。

馬場氏　ー本は人であるという発想を持っただけで、図書館や本の見方が変わってくる。本をしっかり読んでいるときは、対話している感覚がある。

幅氏　ーなかなか返ってこないこともあるが、何度か読んでいると聞こえていると思える時もあり独特のメディアである。

馬場氏　ー図書館だけでなく、本というオブジェクトから語ってもらえてよかった。

トークセッション

和田副市長　ー公民連携が重要なキーワードとなる。どのようにしたら、本事業の取組を市民全体に届けることができるか。

馬場氏　ー公民連携は多彩な手段のうちの 1 つで目的ではない。民が前に出るタイミングも、行政が前に出るタイミングも両方ある。市民と行政のコラボレーションを行っていくうえで重要なことは、語り手とオーディエンスの関係性を徐々に壊していくことにある。

幅氏　ー市民参加というのは図書館の場合でも頻繁に行っている。好きな本を聞くのではなく、内容、字の大きさ、重さまで幅広い視点で聞いていく。みんながよいと思う本はない。そして、本は 1 人でしか読めない。本は孤独さがあり、従来は寂しさと言われていたが、これからは豊かさになるかもしれない。本好きだけでなく、興味のない人も巻き込んで進めている。

和田副市長　ー新しいことへのチャレンジは、行政においても多くないが、今回はチャレンジすることをキーワードとしている。

馬場氏　ーこうした会が開かれたことが、素晴らしいと思う。行政マンは、市民の矢面に立つ機会をつくりたがらない傾向にある。

幅氏　ー中心で動いている人だけでなく、未来に向かってつなげていくには、目で見える状態にしておく必要がある。今回の取組みについても、ポスターやラジオで動きを五感で感じられる状態にしておくことが重要ではないか。

馬場氏　ープロジェクトは、掲載される過程がアーカイブ化されていき、公開されるととっつきやすくなる。我々は行政から出てくる綺麗な最終形のアウトプットしか見ていないが、真実の生々しさや試行錯誤が伝わったほうがむしろ誠実かもしれない。

和田副市長　ー規制緩和の際にも固定観念を取っ払い柔軟な発想を取り入れつつあるが、新しい取組みに臨む際に、柔軟な発想を身に着ける方法はあるか。

幅氏　ー本を読むというのは 1 つ。自分と違う人を敵とみなさず、共通項がないか、合意点を探るということがとても重要である。

馬場氏　ー柔軟な発想という点では、プロジェクトに関わる個人としてしっかり遊ぶことが重要。プロフェッショナルとして仕事としてやることだけでは十分ではない。仕事ということを指す単語は、19 世紀は「labor」、20 世紀は「work」となっていた。産業革命を経て、「labor」を指す単語が「work」に変化した。21 世紀に AI が登場することによって「work」が必要なくなり、人間が追求するのは楽しむという意味で「play」ではないか。play を追求しないと本当によいものはつくれない。

和田副市長はこの拠点がどのような場所になってくれれば、嬉しいと考えているか。

和田副市長　ーまた来たいと思える場所になってほしいと思っている。従来にないものがある場所だとまた行きたくなる。「こういう場所」と今明確にあるわけでなく、少しずつ変わっていくような場所になれば。

馬場氏　ープロジェクトで重要なことは、個人として考えているかどうかということ。建築家として気を付けているのは、この場所や空間に自分が本当に来たいかということ。芸術家として、自分の表現としてこうしなければならないという感覚で進めてしまうとダメで、自分がこの場所に来たければ、他の人もそう思ってくれるのではないかと思うと上手くつくれる。それは、行政マンも同じで、本当に子どもや家族と来たいかという目線で見られれば、このプロジェクトをどう進めればよいかを自分事として捉えられる。究極の公共空間は、みんながそこを自分の場所だと思えること。

馬場氏　ー市事務局職員の人に一個人の思いを聞いてみたい。

市事務局職員①　ー子供が楽しんでほしいという思いに加え、自分自身も楽しみたいという思いがある。文化・芸術に親しみ、更に、自分が活動していきたいと考えている。お金をかければよいものができるとは限らないと思っている。どう運営していくか、どう人がかかわってくれるかが大事。みなさんが楽しんでいただけるプロジェクトとして進めていきたいと考えている。

市事務局職員②　ー面白いことがしたいという一心で取り組んでいる。公共施設は薄暗いというイメージがあるが、馬場さんや幅さんが示してくれたようなキラキラした、色のある場所にしたいと思っている。

幅氏　ー今の言葉に集約されると思う。みなさんから集まったお金を使ってつくるものなので、声を聴きながら進めていくが、100% 声を聴くことはできない。今日は知らない人同士が集まり、ある種の熱を帯びたと思う。この熱を忘れずに、寄り添いを増幅させていくプロジェクトになればよいと考えている。

馬場氏　ー非常に大きなプロジェクトで、藤沢市は日本中から憧れられる場所、日本のモデルになりうる。多くのチャレンジがある場所、チャレンジする人が多い場所が面白くなる。できない自治体は寂しくなり、差が激しくなると思っている。藤沢市の行政、市民、企業は、実験場と位置付けて、怖がらずにどんどん頑張ってほしい。

質疑応答

質問者①　ートークセッションがとても楽しかったし、アイデアも得られた。図書館の 24 時間営業という案を示したい。

馬場氏　ー現段階ではあらゆる可能性がある。どう実現するかは、今後考えていくこと。アイデアをたくさん出していくことが大切。

幅氏　ー不可能とは言いたくない気持ち。夜や早朝しか時間をとれない人は一定数存在する。深夜までやった場合に公共では難しければ、民間で行う可能性も探ることができる。図書館とは何とでも接合できるので、民間の施設と組み合わせることで実現可能な場合がある。

質問者②　ー今日の講演を文化と美術に置き換えながら聞いてきた。本質は全てに共通する部分がある。市民ギャラリー、ホール、図書館、全て文化である。そこに公園と結び付けていただく。あとはいかに有機的につなげるかが課題と感じる。

馬場氏　ー今以上の意見は出ない。発想が当事者化したということだと思う。そういう発想で色んなことを捉えていくことは素敵なことである。

幅氏　ー美術も本も数値化しにくいものである。数値化しにくいものの価値が今後大事になってくるのでは。

質問者③　ーこの拠点がよい場所になっていくには、市民が日常的にこの場所で過ごせるようになるのが完成形だと考えている。諸外国のよい事例では、オープンスペースで過ごすことが習慣化しているように思えるが、どうしたら変わるか、なぜ定着しないか。

馬場氏　ー寛容性のある空間が少なくなっている。合目的的な空間が多くなりすぎている。そうではないぼんやりした空間が担保されるのは重要だと考えている。

幅氏　ー自分の周辺にある自然のようなものに目を向けるという点も大事と言える。雲、空、芝生の色に目を向けてみる、四季を感じてみて、自然に感覚を近づけてみると、オープンスペースで過ごすという習慣が増していくかもしれない。（了）